

京大と大典記念京都植物園 —理学部附属気象学特別研究所の設置をめぐる—

京都大学大学文書館助教 川口 朋子

はじめに

1923（大正12）年11月、京都下鴨に三井家からの寄附で整備された大典記念京都植物園（現在の京都府立植物園）が開園した。京大は、京都植物園が計画段階であった1910年代から大学の教育や研究に京都植物園の土地を活用することを検討していた。分科大学や附属施設の充実を目指す大学にとって、大学近場にある広大な公有地は魅力的に映ったのだらう。京大は園地に関する大学の要望を何度か京都府へ伝え交渉するが、その結果1926年3月に園内の一部土地を借用する形で設置されたのが理学部附属気象学特別研究所である（図1）。



図1 開園当時の大典記念京都植物園（「園案内」『大典記念京都植物園一件』京都府立京都学・歴史館所蔵）
左上の白地部分が、京大が理学部附属気象学特別研究所設置のため京都府から借用した土地。現在は京都府土木事務所が所在。

1. 設置場所をめぐる交渉

気象学特別研究所は、農作物や植物の生育、進化、遺伝に関する研究費を寄附したいという近江の豪商塚本源三郎の申し出を受けて1917年12月に評議会で設置が決定された（『評議会議事録』大学文書館所蔵、識別番号

MP00002）。荒木寅三郎総長は当時整備中であった京都植物園の敷地内に研究所を設置しようと考え、京都府と交渉を開始する。その際、京大は気象学特別研究所と府の農事試験場、府立農林学校（現在の京都府立大学）が研究面で連携することを京都府へ提案した。さらに植物園を訪れた一般の観覧者のために研究室を公開し、普通教育に寄与する構想も示した。

当時の木内重四郎知事は、府内に分散していた農事試験場を下鴨に移転させ京都植物園、府立農林学校と一体的に運用する構想を描いていた。そのため京大の構想は知事の大きい歓迎するところとなり、京都府の全面的支援を得る。京大は研究所建設のため植物園の敷地約2500坪を借用し、京都府に下賜されていた大正大礼の建築物も利用できるようとなった。ただ、これらはいくまで非公式の段階での交渉であり、その後木内知事が汚職疑惑事件で辞任すると京都府との交渉は途絶えてしまった。

2. 公式な交渉開始

1918年に馬淵鋭太郎知事が就任すると翌年、京都府との公式協議が開かれ、園地の北西隅1500坪を京大が無料で使用することが決定した。当初の2500坪から1500坪に敷地が減少したため、気象観測や試験用の植物栽培に必要な通風、日照等の条件を満たせないと判断した京大は、露場と栽培所を兼用するなど一部設計を変更している。さらに土地借用の条件として、敷地内の官舎建設及び研究所内の関係吏員職員の常駐は認められなくなった（『気象学特別研究所関係』大学文書館所蔵、識別番号01A09203）。

3. 協定の締結

1919年に京大に農学部を設置することが決定すると、荒木総長は整備中の京都植物園予定地を農学部附属農場として使いたいと、馬淵知事へ申し入れた。知事に断られると、元総長で文相経験者でもある岡田良平に尽力を頼み、荒木は1920年春、京都植物園の寄附者である三井家に面会し附属農場としての使用を願い出た。

他方、京都植物園の整備工事は第一次世界大戦後のインフレの煽りを受けて大幅に遅れていた。工事費用が底をつく、京都府は二度目の寄附を1920年秋に三井家に申し入れた。こうして、三井家へは大学と京都府それぞれの要望が寄せられることとなった。三井家は京都府からの追加寄附の要望を受け入れるとともに、京大に対しては附属農場として使用することは認めない代わりに学術研究及び実習のための便宜を図った。このように三井家が京都府と京大の双方の要望を仲介する形で、1921年に協定が成立した。

協定は、「一、御大典記念植物園ハ事情ノ許ス限り京都帝国大学ノ学術研究及実習ノ便宜ニ供スルコト 一、府知事ハ植物園長及評議員数名ノ推薦ヲ京都帝国大学総長ニ依頼スベキ場合ハ総長ハ之ニ応セラレタキコト」(前掲『評議会議事録』) というもので、京大と京都植物園の連携関係を公式に決定づけるものとなった。

4. 度重なる計画変更

三井家から二度目の寄附を受け、植物園の整備工事はようやく終了した。1923年秋に開園の見通しが立つと、研究所の土地の引き渡しも目途が立ち、大学と京都府は研究所の仕様について協議した。このとき京都府からは、研究所の入口は園地外の道路に面すること、研究所の周囲に垣を設けることなど新たな条件が示された(前掲『気象学特別研究所関係』)。京大が用意した図面では研究所から直接、京都植物園内へ通じる通路が見られる

(図2)。通路は、植物園を訪れた一般の観覧者が研究所を見学する際に使う出入口であり、研究所の一般公開実現のために必要なものだった。

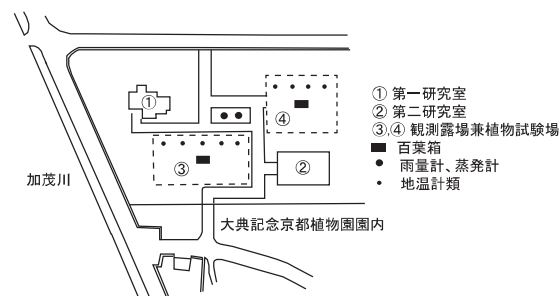


図2 京大が用意した気象学特別研究所建物配置図案(『気象学特別研究所配置図説明』『大典記念京都植物園一件』よりトレース作成)

京大は、京都府が示した条件は当初掲げた研究所の方針と相容れず受け入れ難いとし、今までの交渉経緯を改めて京都府へ説明し、条件の見直しを求めた。1924年に池田宏知事が就任すると、荒木総長は植物園と研究所の関係に特別の配慮を願い出る書簡を送っている(『大典記念京都植物園一件』京都府立京都学・歴史館所蔵)。

それでも大学の希望は認められず、京大は再び研究所の仕様を変更せざるを得なかった。なお、このとき京都府側は研究所の敷地を有料で貸し出す案も検討していたが、1921年の京大との協定内容を考慮し無償で貸し付けることが京都府参事会で決定されている。

おわりに

1925年12月、京大は京都植物園の北西隅1500坪の土地を気象学特別研究所の設置のために借用するという誓約書を京都府へ提出し、ここに正式に起工が了承された。こうして気象学特別研究所は、気象学講座の附属施設として翌年3月に開設し、1980(昭和55)年3月に花山天文台に統合されるまで植物園内で研究活動を行った。